様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２３２００７７

研究課題名（和文）碑文コーパスによるビルマ語および周辺少数民族言語の通時的研究

研究課題名（英文）Diachronic Study on Myanmar and Neighboring Minority Languages Based on the Corpus of Inscriptions

研究代表者
澤田　英夫（SAWADA, Hideo）

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授

研究者番号：６０２８２７７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　10,900,000円、（間接経費）　3,270,000円

研究成果の概要（和文）：ビルマ語はチベット＝ビルマ語派ビルマ語群に属する東南アジアの主要言語の一つで、12世紀にまで遡る大量の文字資料を持つ。本研究では、ビルマ語および隣接諸言語の碑文テキストを外注入力し、写真撮影調査で得られた碑文画像も参照しつつ電子コーパス化した。
この碑文コーパスに基づき、ビルマ語の音韻・文法およびビルマ文字の体系の通時的研究を行った。また碑文コーパスとフィールド調査で得られた言語データに基づき、ビルマ語・ビルマ文字と周辺少数民族言語・文字の間の相互影響の研究、ならびに、ビルマ語群マル下位語群の祖語の再構に向けての研究を行った。現在、碑文コーパスのオンライン公開の準備に向けた作業を行っている。

研究成果の概要（英文）：Burmese is a major language in Southeast Asia, the principal language of Burmish group in Tibeto-Burman branch, and has ample written material which can be traced back to 12cAD. In this research project we made a corpus of the inscriptions of Burmese and adjacent languages, by digitizing the texts of these inscriptions in roman transcription and checking them by reference to the digital images of inscriptions acquired through the fieldworks in Myanmar as necessary.
Based on the corpus we conducted the research on some topics on the diachrony of Burmese phonology, grammar and the system of Burmese script. We also conducted the research on the mutual influence between Burmese language/script and adjacent minority languages/scripts, and the research toward the reconstruction of Maruic sub-group of Burmish group, based on the corpus as well as data from fieldwork. Now we are preparing for the on-line publication of the corpus.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：ビルマ語　碑文　コーパス　少数民族言語　通時的研究　歴史言語学　比較言語学　モン=ビルマ文字

１．研究開始当初の背景

ビルマ語はチベット＝ビルマ系言語の中でチベット語に次いで古い文献の歴史を持つ言語であり，ミャンマー連邦の公用語であるが，ビルマ語研究の進展の度合は，この言語が持つ上記のステータスに見合ったものとは言い難い．碑文に関してはいくつかの基本資料が存在するが，これらの資料を用いた言語学的研究は未だ少ない．ミャンマー国内では綴字・語義の研究，国外でも上記に加え音韻論の分野に留まり，文法の通時的研究に至っては未だ手つかずの感がある．

視野を同系統の言語に広げると，ビルマ語群に属する少数民族言語の記述研究は一定の進展をみた．しかし，それらの間の系統的関係の詳細の解明，とりわけビルマ語群祖語の再構には至っていない．ビルマ語群に属するビルマ語以外の言語からの知見を比較研究へと還元する試みが，そろそろなされなければならない時期に来ている．

ビルマ語の周囲に分布する少数民族言語のうち，上記のような直近の同系言語以外にも，モン語，シャン語，カレン諸語などのように，語彙や文法要素の借用，書記体系の受容を通して相互に影響しあっているものがいくつかある．これら言語・文字の自民族研究者による研究が散見されるが，その中には民族主義のバイアスが強く実証性に乏しいものも少なくない．そのため，資料に基づく実証的な研究を行う必要がある．

２．研究の目的

本研究の目的は，東南アジアの主要言語の一つであり，12 世紀にまで遡る大量の文字資料を持つビルマ語を中心としたこの地域の碑文テキストを電子コーパス化し，それを用いて，この地域で現在話されるビルマ語，隣接するモン語，カレン諸語，系統的にみてビルマ語に最も近い少数民族言語ロンウォー(マル) 語・ラチッ(ラシ) 語・ツァイワ (アツィ) 語などの歴史･比較･記述言語学的研究，ならびにモン＝ビルマ文字の文字学的研究を進展させることである．

碑文コーパスを用いて行うことを目指した研究は，大きく分けて次の 3 種類である．

(1) ビルマ語およびビルマ文字の史的研究：碑文コーパスの KWIC コンコーダンスを作成し，文字要素とその組み合わせの通時的な分布を調べ，そこから音韻体系の変遷をあとづける．また文法形式について，その担う文法機能の種類も考慮して通時的な分布を調べ，文法体系の変遷を解き明かす．

(2) ビルマ語と周辺言語との相互影響の研究：碑文資料を持つモン語やピュー語とその文字がビルマ語・ビルマ文字に与えた影響を研究する．また，カレン諸語がビルマ語から受けた影響を研究する．

(3) ビルマ語群祖語の再構に向けた研究：碑文コーパスの分析から得られる 12-3 世紀ビルマ語の音韻体系を視野に入れつつ，ビルマ語群のうちマル下位語群をなすロンウォー(マル) 語・ラチッ(ラシ) 語･ツァイワ(アツィ) 語のデータからマル下位語群祖語再構を試みる．

３．研究の方法

東南アジアの主要言語の一つであり，12 世紀にまで遡る大量の文字資料を持つビルマ語を中心としたこの地域の碑文テキストを電子コーパス化した．

(1) 電子化の対象とする書き起こしテキストとして，*Old Burmese Inscriptions*，5vols (1972-1998)および *Epigraphia Birmanica: being lithic and other inscriptions of Burma*，4vols. (1919-1936),*Newly found Inscriptions* (2005)，『トゥーパーヨン碑文集』(2010)，『マンダレー王宮碑文集』(2011)，『モン碑文集成』(1965)などを選定した．

(2) 研究代表者あるいは研究分担者が 2010 年 12 月，2011 年 12 月，2012 年 12 月-2013 年 1 月，2013 年 12 月-2013 年 1 月の計 4 回ミャンマーに出張し，バガン遺跡を中心とするいくつかの地域で，ミャンマー文化省考古学局の協力を得て碑文の写真撮影を行った．

(3) 代表者が考案した現代ビルマ文字綴字転写表をもとに，現代ビルマ文字正書法に現れない文字要素や組み合わせに対応できるようにビルマ文字のローマ字転写体系を拡張し，それに基づいてテキストの外注入力を行った．入力の過程で入力仕様中に指定した転写体系にない変則的ビルマ文字表記の存在が明らかになった時には，その転写のしかたを定め転写体系を修正した．必要に応じて写真を参照しつつ，入力されたビルマ語碑文テキストの校正を行なった．

４．研究成果

(1)ビルマ語およびビルマ文字の史的研究

①バガン期(AD12-13c)ビルマ語碑文のコーパスをもとに，同一の音を表す綴字変異{-uiw'～-iw'～-uw'～-eiw'}の歴史的分布を調べた．研究代表者はこれについて 2013 年 8 月の国際シナ＝チベット言語学会議の発表の中で扱った．

②バガン期(AD12-13c)ビルマ語碑文のコーパスをもとに，格標識であった{saN~'}が時代を経るに従って名詞節標識の，さらに文標識の機能を獲得する通時的過程を追跡した．このテーマに関して，2012 年 10 月 26-28 日にシンガポールで開催された第 45 回国際シナ＝チベット言語学会議で研究分担者岡野と研究代表者が共同で発表"Diachronic Consideration of Burmese “saN~'”"を行った．

(2)ビルマ語と周辺言語との相互影響の研究

①連携研究者（加藤）が 2012 年 3 月にヤンゴンで，また 2013 年 9 月にタイのターク県

メーソットで，隣接少数民族言語であるポー=カレン語の語彙・文法調査を行った．
②モン文字とビルマ文字の関係を示す実質的証拠を探究した．本来は子音字でない母音字{a}に末子音字化記号を付加して声門閉鎖末子音を表す表記法は，インド系文字の中で碑文モン文字と碑文ビルマ文字にのみ見られ，このことは2つの文字の間に系統的つながりがあることを示唆する．研究代表者はこの点を2013年5月の東南アジア言語学会で発表した．また，12-13世紀ビルマ文字碑文に見られる不規則韻表記のあるものは，ビルマ文字草創期に11世紀モン文字碑文の韻表記が混入したものであることが碑文コーパスから明らかになった．研究代表者はこの点について同年8月の国際シナ＝チベット言語学会議で発表した．
③ビルマ文字が少数民族の文字に与えた影響の事例として，シャン文字に与えた影響を考察した．旧シャン文字では，開音節で表記し分けられる母音が閉音節においては表記上の区別を失う．このような母音記号の「中和」は，母音記号と末子音字の間に強い共起制限があるビルマ文字をもとにシャン文字が作られたことに由来すると考えられる．研究代表者はこの点を2014年2月にAA研で開催された文字に関する国際シンポジウムで発表した．

(3)ビルマ語群祖語の再構に向けた研究
①連携研究者（藪）が2011年11月にカチン州の州都ミッチーナーでビルマ語群に属するアチャン語とツァイワ語の語彙・文法調査を行った．また，研究代表者が2012年12月23日-2013年1月8日の間，カチン州の州都ミッチーナーで語りのテキスト（ロンウォー語8編，ラチッ語10編）を収集し，文法化した動詞列の調査（ロンウォー語），母音長化が生起する文法的環境の調査（ラチッ語），動植物語彙の収集（ロンウォー語・ラチッ語）を行った．
②ビルマ語群マル下位語群祖語再構の第一歩として，研究代表者が収集したロンウォー語・ラチッ語のデータ，連携研究者（藪）が収集したツァイワ語のデータとビルマ語碑文コーパスのデータを照合し，初頭子音・韻・声調の対応関係を検討した．

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計19件）

① 岡野 賢二,「ビルマ語の文の下位分類について」,『チベット＝ビルマ系言語の文法現象２：述語と発話行為のタイプからみた文の下位分類』, 2013, pp.41-80, 査読無.
② 岡野 賢二,「ビルマ語の動詞句」,『東南アジア大陸部諸言語の動詞句』, 2013, pp.243-293, 査読無.
③ 岡野 賢二,「日本語と似て非なる言語～ビルマ語～」,『東京外国語大学オープンアカデミー2012年度後期開講講座「言葉とその周辺をきわめる」活動報告書』, 2013, pp.1-21, 査読無.
④ 岡野 賢二,「ピューとビルマの「始まり」」,『ミャンマーを知るための60章』, 2013, pp.22-26, 査読無.
⑤ 加藤 昌彦,「ポー・カレン語の文の分類」,『チベット＝ビルマ系言語の文法現象２：述語と発話行為のタイプからみた文の下位分類』, 2013, pp.41-80, 査読無.
⑥ KATO, Atsuhiko, "Verb particles indicating 'up' and 'down' in Western Pwo Karen", *Tokyo University Linguistic Papers* 33, 2013, pp.99-117, 査読無.
⑦ KATO, Atsuhiko, "Mermaid construction in Burmese", Tsunoda, Tasaku (ed.) *Adnominal Clauses and the 'Mermaid Construction': Grammaticalization of Nouns* [NINJAL Collaborative Research Project Reports 13-01], 2013, pp.419-463, 査読有.
⑧ KATO Atsuhiko, "Five levels in Burmese", Tsunoda, Tasaku (ed.) *Five Levels in Clause Linkage.* (2 vols.), 2013, pp.687-726, 査読無.
⑨ 加藤 昌彦,「ビルマ語と少数民族語,『ミャンマーを知るための60章』, 2013, pp.180-183, 査読無.
⑩ 澤田 英夫,「ロンウォー語の文構造の概観」,『チベット＝ビルマ系言語の文法現象２：述語と発話行為のタイプからみた文の下位分類』, 2013, pp.1-40, 査読無.
⑪ 澤田 英夫,「ロンウォー語の動詞句」,『東南アジア大陸部諸言語の動詞句』, 2013, pp.294-362, 査読無.
⑫ 澤田 英夫,「ビルマ文字」,『ミャンマーを知るための60章』, 2013, pp.66-69, 査読無.
⑬ KATO, Atsuhiko and Khin Pale The, "Myeik (Beik) dialect of Burmese. Sounds, conversational texts, and basic vocabulary",『アジア・アフリカ言語文化研究』83, 2012, pp.117-160, 査読有.
⑭ SAWADA, Hideo, "Optional Marking of NPs with Core Case Functions P and A in Lhaovo", *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 35, 2012, pp.15-34, 査読有.
⑮ 岡野 賢二,「現代口語ビルマ語の名詞化節について」,『日本語・日本学研究』1, 2011, pp.13-31, 査読有.
⑯ 澤田 英夫,「インド系文字の現地化と祖先の記憶」,『フィールドプラス』5, 2011, pp.8-9, 査読無.
⑰ 澤田 英夫,「ロンウォー語の名詞句の組成」,『フィールド調査，言語コーパス，言語情報学 III』（コーパスに基づく言語学教育研究報告7）, 2011, pp.259-283, 査読無.

⑱ 澤田 英夫, 「インド系文字，東南アジアへ」,『世界の文字を楽しむ小事典』, 2011, pp.48-52, 査読無.
⑲ 加藤 昌彦,「ビルマ語の「上」を表す名詞の後置詞的用法について」,『大阪大学世界言語研究センター論集』4, 2010, pp.31-54, 査読有.

〔学会発表〕（計 13 件）
① SAWADA, Hideo, "Adapting an Existing Script to Strange Languages: Cases of Indic Scripts in Mainland Southeast Asia", International Workshop on Endangered Scripts of Island Southeast Asia, 2014.2.27, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.
② 加藤 昌彦, 「ポー・カレン語の名詞句」, TB+研究会, 2013.11.30, 京都大学人文科学研究所.
③ 岡野 賢二・益子 幸江, 「ビルマ語の軽音節のピッチについて」, 第 27 回日本音声学会全国大会, 2013.9.28, 金沢大学.
④ SAWADA, Hideo, "Non-canonical Rhyme Notations found in Burmese inscriptions of Bagan period", 46th International Conference of Sino-Tibetan Languages and Linguistics, 2013.7.10-13, Dartmouth College, New Hampshire, USA.
⑤ SAWADA, Hideo, "Some properties of Burmese script", 23rd meeting of Southeast Asian Linguistic Society, 2013.5.29-31, Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand.
⑥ 澤田 英夫, 「ビルマ文字概観—インド系文字の視点から—」, 2013 年ビルマ研究会, 2013.4.20-21, 東京外国語大学.
⑦ OKANO, Kenji & SAWADA, Hideo, "Diachronic Consideration of Burmese “saÑ” ", The 45th International Conference of Sino-Tibetan Languages and Linguistics, 2012.10.26-28, Nanyang Technological University, Singapore.
⑧ SAWADA, Hideo, "On the composition of Noun Phrases in Lhaovo", The 45th International Conference of Sino-Tibetan Languages and Linguistics", 2012.10.26-28, Nanyang Technological University, Singapore.
⑨ SAWADA, Hideo, "Phonogramics of the marker {-su} in early Burmese inscriptions: from the viewpoint of Indic scripts", The 44th International Conference of Sino-Tibetan Languages and Linguistics, 2011.10.7-9, Central Institute of Indic Languages, Mysore, Karnataka, India.
⑩ OKANO, Kenji, "Is the aspirated fricative “s(h)-” really a phoneme in colloquial Burmese?", The 17th Himalayan Languages Symposium 2011.9.8, UNITY (Inter-university Research Facility), Kobe, Japan.
⑪ Kato, Atsuhiko, "The agent-defocusing function of a Pwo Karen noun that means "thing" ", The 17th Himalayan Languages Symposium, 2011.9.8, UNITY (Inter-university Research Facility), Kobe, Japan.
⑫ SAWADA, Hideo, "Issues on the Creation of Literacy in Languages of Kachin State", Workshop on Linguistic Documentation, the 17th Himalayan Languages Symposium, 2011.9.7, UNITY (Inter-university Research facility), Kobe, Japan.
⑬ SAWADA, Hideo, "Case-marking of P and A in Lhaovo", Workshop on Optional Case Marking, 16th Himalayan Languages Symposium, 2010.9.3, SOAS, University of London.

〔図書〕（計 1 件）
① 澤田 英夫（編）, 『チベット＝ビルマ系言語の文法現象２：述語と発話行為のタイプからみた文の下位分類』, アジア・アフリカ言語文化研究所, 2013, iv+481pp.+付表 17pp.

６．研究組織
(1)研究代表者
澤田　英夫（SAWADA, Hideo）
東京外国語大学・アジアアフリカ言語文化研究所・准教授
研究者番号：60282779

(2)研究分担者
岡野　賢二（OKANO, Kenji）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授
研究者番号：60376829

(3)連携研究者
藪　司郎（YABU, Shiro）
大阪大学・名誉教授
研究者番号：30014509

加藤　昌彦（KATO, Atsuhiko）
大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授
研究者番号：30290927